

今年3月20日に1人の外国人旅行者が県内にて麻疹（はしか）と診断され、その後、次々と患者が発生し、6月11日の終息宣言までの期間に101人の麻疹患者が報告された。この非常事態に県民一体となった迅速な対応により、幸いにも1人の死亡者も出さずに終息できたが、本県の観光業界に大きな損失をもたらすなど、さまざまな課題を残した。

麻疹は感染力が強く、潜伏期間約10～12日後に風邪症状と結膜の充血、3日後に高熱と発疹が出現して、肺炎や脳炎などを併発して重症にな

知念 正雄



論壇

り、時に死亡する感染症である。今回の患者の7割は20代から40代の成人で、ほとんどがワクチン未接種か、不明の方々であった。

風疹（三日はしか）は7月下旬から首都圏を中心に多発

風疹に対する免疫を持たない妊娠初期（特に20週以内）の妊婦が風疹に感染すると目、耳、心臓などに障害のある先天性風疹症候群児（風疹児）の出生につながる。風疹においても麻疹同様に、患者

麻疹・風疹の感染防止

若年層のワクチン接種を

し、10月10日現在1103人の風疹患者の報告があり、本県でも4人の患者が発生している。風疹は発熱、発疹などの症状で、麻疹に比べて非常に軽く、知らないうちに

の96%は成人であり、30代から40代の男性が多い。予防接種歴がないか、あるいは不明の方が92%を占めている。日本では1999年から2001年にかけて麻疹が流行し、9人の乳幼児がなくなっ

た。風疹に関しては沖縄県では1965～66年の風疹流行後に408人の先天性風疹症候群児の出生という悲劇的事例がある。

さらに2013年には全国的に風疹が流行し（1万4344人）、45人の風疹児の出生が報告された。妊婦を風疹感染から守るために、夫やパートナーはもちろん、一般社

会の30代から40代の成人男性は積極的にMR（麻疹・風疹混合）ワクチンを接種してほしい。国は2020年のオリンピック開催を控えて、麻疹・風疹排除の目標を掲げているが、効果的な政策がない。発

生を阻止するにはワクチン接種による予防が最優先事項である。

全国都道府県と地域市町村は、MRワクチンの定期接種対象者（1期／1歳児、2期／5歳児）に対する積極的接種勧奨と同時に、ワクチン未接種者の多い20代後半から30代／40代の成人に対し、緊急

の行政措置によるMRワクチン接種を考慮すべきである。沖縄県が歴史的経験を生かして、その先陣的役割を担うことを期待する。（うるま市、小児科医・沖縄県はしか〇プロジェクト委員会委員、81歳）